開会挨拶

石野次男（統合幕僚学校長）

本日はご多用中のところ、「第 2 回国際平和と安全シンポジウム」にお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。また、本日は、大阪大学の星野教授、国連エチオピア・エリトリア派遣団軍司令官を経験されたロバート・ゴードン元英国陸軍少将、難民を助ける会理事長の長先生、国連政治局の川端政務官、岐阜大学の上野先生にもご参加いただきまして、心から感謝申し上げます。

さて、わが国が初めて国連平和維持活動に参加してから今年がちょうど 20 年目の節目に当たることは、既に皆さまご案内のことと思いますが、今日までの歩みを簡単に振り返ってみたいと思います。防衛省・自衛隊は、国際平和協力法、いわゆる PKO 協力法が制定された平成 4 年に、初めて国連カンボジア暫定統治機構へ PKO 部隊を派遣し、それ以来、南スーダン派遣団まで、15 のミッションに多くの部隊および隊員を派遣し、その数は延べ約 8,500 人に上っています。その間、平成 10 年、13 年と、2 度の PKO 協力法の改正が行われ、それまで凍結されていた本隊業務の凍結解除等、業務の範囲を拡大するとともに、武器の使用に関する枠組みも徐々に変わってまいりました。平成 19 年には、国連平和維持活動をはじめとする国際平和協力活動が、わが国の防衛や秩序の維持といった任務と並ぶ自衛隊の本来業務とされました。

また、国連平和維持活動以外でも、国際緊急援助活動、テロ特別措置法やイラク人道復興支援特別措置法、あるいは海賊対処法に基づく、ソマリア沖、アデン湾における海賊対処等に陸・海・空の部隊を派遣しています。

さらに、平成 23 年度以降に係る防衛計画の大綱では、以前の大綱にも増して、「世界の平和と安定および人間の安全保障の確保に貢献すること」が強調されているところであり、わが国として、これらの諸活動に積極的に参加し、質の高い貢献を行うことによって、国際社会から強い信頼と高い評価を得ています。

一方、この 20 年間で国連ミッションを取り巻く情勢は大きく変化し、それに伴って国連ミッション自体も試行錯誤を繰り返しながら進化してきています。伝統的な国連平和維持活動は、国家間の停戦監視を主な任務としていましたが、現在では、継続可能な平和を構築するための複数の機能が複雑に絡み合った多機能型ミッションへと進化しています。また、多機能であるがゆえに、ミッションの担い手であるアクターは、軍のみにとどまることなく、警察、文民と、非常に幅広い範囲にまたがっており、これらの複数のアクターが有機的に統合されなければ、「国際の平和と安全の維持」「人権の保障」「開発と復興」という国連の目的を達成することは不可能であります。このような環境下にありますので、自衛隊としても国連ミッションの全体像と派遣国の課題と対応についての最新の情報を理解しておかねばならないことは言うまでもありません。

このシンポジウムの狙いは、国連および加盟国が直面している課題と将来的方向性につ

いて、防衛省・自衛隊のみではなく、官・民・学で共有することにより、質の高い国際貢献の実施と、そのための人材育成に資するというものであります。このため、毎回単発的なテーマで実施するのではなく、連続シンポジウムとして、国連ミッションの大きな方向性に沿って、毎回の討議の展開から次回のテーマを抽出し、新たな討議に結び付けていくというものです。

昨年度に引き続き第2回目の開催となった今回のシンポジウムでは、「国連平和維持活動の多機能化、国連ミッションの統合化」という点に焦点を当てており、本日お招きしました講師の方々に、国連事務局、国連ミッション司令部、活動の現場、組織論のご研究、それぞれの視座から「国連統合任務」を立体的にとらえた上で、今後の課題と方向性について有意義なお話をお伺いできるものと期待しております。

最後に、ご多忙中にもかかわらず、今回ご参加くださった国内外の有識者の方々およびお集まりの皆さまに重ねて感謝申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。